

広島県NIE公開セミナー（兼第115回広島県NIE学習会）

テーマ 被爆体験の継承を考える～はがき新聞の作成を通して～

日時：令和7年12月7日(日) 13:30～16:30

会場：中国新聞ビル

参加者：40名

第1部【講話】「あの日を、わたしは忘れない」

講師 被爆体験証言者 河野 キヨ美 さん



1931年、広島市旧高田郡市川村（現広島市安佐北区）生まれる。1945年8月7日、女学校2年生の時、入市被爆。その記憶を「原爆の絵」に描き、絵本『あの日を、わたしは忘れない』（勉誠社）を出版。2003年から中学生に被爆体験証言を行う。

2011年に米国ミズーリ州で、2013年に、ワシントン州、オレゴン州、ニューメキシコ州で、大学、高校、中学校にて証言を行った。

2025年、8月6日 原爆資料館で平和記念式典に参加した各国の大半をはじめ、20以上の国の人々などおよそ150人にみずから体験を語った。

【講話内容】

「いくら年を取っても、忘れたくても忘れられない」。河野キヨ美さんは80年前に見た記憶を静かに話しえました。原爆投下の翌日に訪れた広島赤十字病院（現在の広島赤十字・原爆病院）で、円形の花壇に中学生たちの死体が放射状に積まれていました。「木材のように投げてあった」。その衝撃の光景を1枚の絵に描き残しました。

河野さんは当時、14歳の女学生で、高田郡市川村（現広島市安佐北区）に暮らしていました。学校では、集められたミシンで兵隊のシャツを縫ったり、なぎなたの訓練をしたりしていました。「今思えば馬鹿なことをしていたと思うが、鉢巻をした軍国少女だった」と振り返ります。

そして、「あの日」を迎えます。

「静かな朝だった。突然、近くで『ドカン！』と聞いたこともないような爆発音がした」。すぐさま外に飛び出しましたが、何も変わりありません。ふと見ると、広島の方角の山々から音もなく雲が沸き上がってきました。原子爆弾のキノコ雲でした。

翌日、母とともに2人の姉を探しに広島市内に向かいました。広島駅の一つ手前、矢野駅のホームに降り立つと、ものすごい悪臭に襲われました。家々が消え、目前には真っ黒い平野が広がるだけ。「鮮やかな緑の似島が遠くに見えたのが、深く印象に残った」市街には、焼け焦げて男女の区別もつかず、目玉や内臓が流れ出て赤くふくらんだ死

体があちらこちらに。「人生で一番怖かった」。ようやく姉たちの無事を確認し、帰路につきました。「最後は何も感じなくなって、どうやって家に帰ったのか、覚えていない」。少女時代に体験したショックの大きさがうかがえます。

75年間草木も生えないといわれた広島は、今、豊かな街になりました。しかし、ウクライナに侵攻したロシアが核兵器をちらつかせたるなど、河野さんには、世界は自分の思いとは逆行しているようにみえています。

「被爆国の中には、核兵器廃絶と戦争の愚かさを伝えていく義務がある。心のうちに平和の灯をともし続け、戦争は絶対にダメだと思い続けてほしい」。私たちは大きなバトンを受け継いだのではないでしょうか。

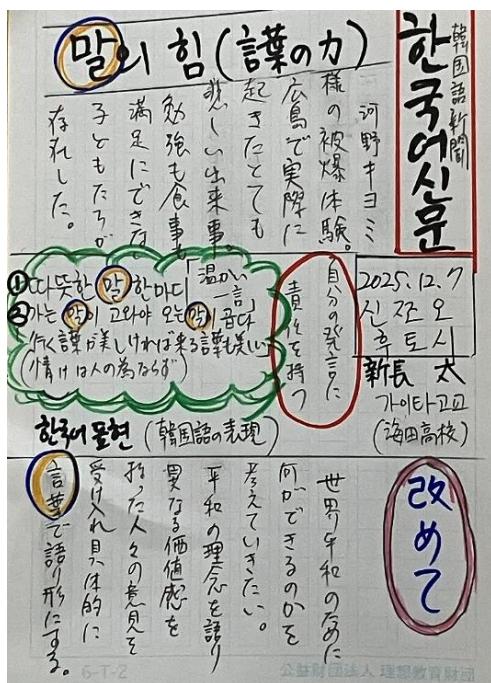
第2部【はがき新聞の作成と交流】

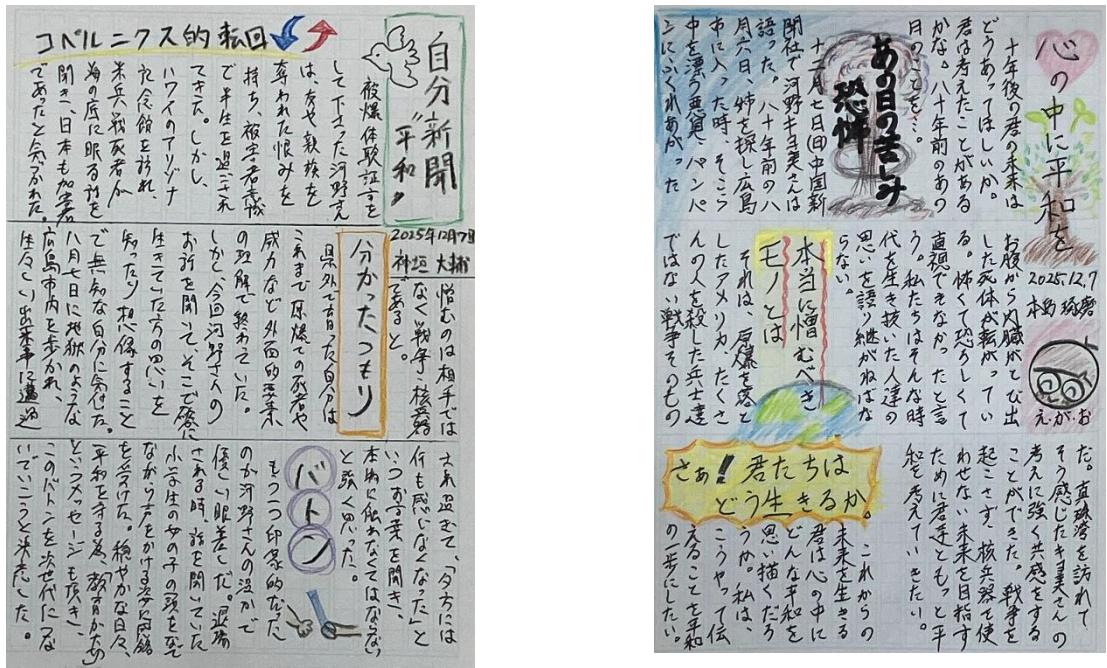
講話を聴いて、参加者は「だれに」「何を」伝えたいかという視点ではがき新聞を作成しました。

【参加者が作成した新聞名】

繋いでいこうこの「思い」 原爆を知る。そして伝える。 これから 平和新聞
核の未来は私たちが決める 灯新聞 ヒロシマのこと あの日を忘れてはいけない
平和新聞 HIROSIMA PEACE MESSAGE 私にできることは 繋ぐ
ヒロシマの心をつなぐ 河野キヨ美さんの講話をから 灯新聞 平和な未来 体験をつなぐ
心の中に平和を ヒロシマをくり返さない ピースレポート ピース新聞 韓国語新聞
被爆体験者の願い 自分新聞《平和》 平和新聞 あの日を知る 「私」の思い
架け橋新聞 平和のとりで新聞～三人の孫へ～

【参加者が作成した新聞の一部】





【編集後記】

12月8日の深夜、青森県沖で大きな地震が発生し、北海道や岩手県など近隣に津波警報が出た。「すぐに高いところへ逃げてください」。テレビから各局のアナウンサーが強い口調で呼びかけ続けた。

その背景には、異常事態に遭遇しても「たいしたことはない」「自分は大丈夫」と思い込み、冷静でいようとする人間の心理がある。「正常性バイアス」といい、避難の遅れや被害の拡大につながる原因になる場合がある。

あの時の広島もそうだったのかもしれない。被爆体験伝承者の河野キヨ美さんは「あちこち空襲される中、広島に空襲がないのを不思議に思っていた」と振り返る。

「広島から多くの人がアメリカに働きに行っているから、広島は大丈夫よ」。そんな大人たちの話を半信半疑で聞いていた。

アメリカは早くから原爆を落とす計画を進めていた。威力を調べるため、広島を含めていくつか候補地を決め、その町は手つかずにしていただけだった。「私たちはそれを知らんだけだった」

広島・長崎の原爆投下以降、非人道的な兵器として「核のタブー」が維持されてきた。だが、ウクライナに侵攻したロシアは核兵器の使用をちらつかせた。

河野さんは被爆国日本には核兵器廃絶の義務があると語る。そのためにも「一人一人が心のうちに平和の灯を灯し、戦争は絶対にだめだと思い続けてほしい」

私たちは「もう核兵器は使われないだろう」と思い込んでいないか。そんな「正常性バイアス」に落ち込まないよう、河野さんの言葉を胸に刻んでいたい。

(事務局)